

皮膚科 医学史

吉田松陰と疥癬

服部 瑛* 服部 友保*

Key words—疥癬, 小瘡, 黒船, 吉田松陰

はじめに

前回、江戸安政時代の暴瀉病(コレラ)の古文書に接して、「幕末当時コレラは流行するが、感染することはまったく知らなかった」ことが実に意外だったと述べた¹⁾。それは本邦だけでなく、ヨーロッパでも同じ状況で、「1854年にロンドン在住の医師ジョン・スノーが市の中心部の一地区で発生したコレラのもとをたどると、すべてひとつの汚染された飲料水の水源に行き着くことを見事に証明した。だが、スノーの議論は状況証拠だけに依拠するものであり、また感染説はヨーロッパ中の権威ある高名な医学者によって決定的に否定され、1880年(明治13年)代の“細菌”の発見まで待たねばならなかった」というのである²⁾。

しかしながら感染(伝染)のことは、たとえば目で明らかにみえる蝨のような寄生性疾患では経験的に熟知していたはずである。それならば同じ寄生性疾患でも目でみえにくい疥癬の場合はどうだったのだろうか、ふと疑問に思えてきた。

吉田松陰の密航騒ぎ

ずいぶん昔ある本を読んで、「吉田松陰はペリーの黒船に乗船しアメリカへの渡航を望んだが、疥癬がみつかって送り返された」という話を臚げながら覚えていた。ネットで調べてみると堤豊先生は「松陰と弟子の重輔があえなく送り返された理由は、日米和親条約を結んだばかりなのに相手国の法律を破るのはまずい、とペリーの代行ウィリ

アムズが判断したためといわれている。だが、実際は、松陰と重輔はともに疥癬を患っていたことが理由らしい。とくに重輔は、ノルウェー疥癬だった可能性がある。そんな伝染性皮膚疾患をもった輩に乗船されては困るというのが本音だった可能性がある。汗だくでやっとの思いで漕ぎ着いたため、裁着袴(旅行用の袴)をつけていたものの、帯なし状態の2人の皮膚病変はおそらくむき出しだったのだろう」と説得力のあるコメントで、松陰が送り返された理由に疥癬説を唱えておられる。医者でもない人が簡単に疥癬の診断はできるのかしら、あるいは疥癬が伝染することを知っていたのかしらと疑問はますます広がるばかりだった。

司馬遼太郎の『世に棲む日日』

司馬遼太郎は、幕末のことを書いた著作が多い。豊富な学識と史実の中から人物を浮き上がらせる着想力は天才的だと思っているのだが、医学的な記載も詳細かつ具体的である。確か、『世に棲む日日』で吉田松陰を取り上げていたはずなので何か情報があるかもしれない。そう思って子細に読んでみると確かに疥癬に関する記述が出てきた^{3,4)}。「松陰は、手の指のまたに疥癬をわずらっていた。ひぜんともいわれるこの皮膚病は、不潔にしておくとかかりやすいということであり名誉なものではなく、松陰もこの皮膚病を持ったまま外国人に接することがひどく苦になっていた。」、「松陰と金子(重輔)は、(嘉永6年3月)25日、蓮台寺の湯

* Hattori, Akira (理事長) / Hattori, Tomoyasu (院長)

医療法人はっとり皮膚科医院(〒370-0071 高崎市小八木町2027-4)

にいた。湯につかるごとに、疥癬の手をこすり、はやくなおることをねがった。」というものであった。

そして、ていねいなことに、3年ほど前の嘉永3年松陰が平戸に遊学しての帰りの舟での同乗者は「船頭と水夫が四人、舟客はふたりである。一人は天草から平戸にきていた門徒僧で、疥癬をわずらっていた。」と感染に至る経緯まで想像させてくれる記載もあった。

しかしそういったお膳立てがありながら、アメリカ側の渡航拒絶の理由は「この処置につき、もし提督(ペリーのこと)が自分(ペリー代行のウィリアムズ)だけの勘定で事をはこんでいいという立場なら、この気の毒な二人の日本人を、喜んで艦内にかくまったであろう。しかし米国はやっと条約を日本と結ぶことができた。日本側の条件は、日本の法律をまもってくれということであった。もしここで米国が、この日本人民の逃亡に共謀するとすれば、日本の国法をやぶることになる。(以下略)」というもので、司馬遼太郎は疥癬説を否定している。果たして堤説と司馬説どちらが正しいのだろうか。

■ 吉田松陰全集

前置きが長くなってしまったが、その話題に入る前に吉田松陰が本当に疥癬にかかっていたかどうか検証する必要がある。ひょっとすると、多量に残された松陰の手紙や日記の中に疥癬のことがかけらのように残されているかもしれない。

『吉田松陰全集』という全11巻の書物がある。今でも新刊で買えるのだが、高価で手が出ない。東京神保町に久し振りに出向いた折、数軒の古書店をまわってみた。嬉しいことに安価な、新品に近い全集を手に入れることができた。

最近、和田康夫先生の疥癬に関する文章⁵⁾に接した。その中で古文書を購入する際の喜びと興奮をさり気なく述べておられるのだが、私の場合もそれに近いかもしれない。ただし和田先生のほうがはるかに博学である。それにしても皮膚科医の

中にも古文書を読む先生がいらっしゃることにびっくりし嬉しくもなった。その文章に刺激されたためあって疥癬のことを改めて書く気になったわけである。今回の話題は、『群馬県医師会報』^{6~8)}に掲載したものを骨子にしていることをまずお断りしておきたい。

■ 疥癬の記事はあるかしら？

早速、松陰が渡航を企てた嘉永・安政時代に絞って『吉田松陰全集 第7巻』⁹⁾を読んでみた。この第7巻には嘉永2年～安政4年の松陰の手紙類が収められている。

読み進めていくと、手紙の中に「小瘡」という言葉が出てきた！ それは、嘉永6年6月20日で、松陰が「小瘡再発絶えて其の患なし、萬放念を祈る。」と兄杉梅太郎に宛てた手紙であった。実はこのとき小瘡は「其の患なし」とあるから消褪していたようである。このとき松陰は黒船への密航のかどで江戸の獄舎に幽閉されており、兄梅太郎も江戸にいた。松陰が決行した黒船騒ぎは翌年の安政元年3月末だった。

その3カ月後の安政元年9月、松陰は萩の野山獄に移され、兄の梅太郎も萩に帰っていた。11月5日、兄梅太郎が「小瘡如きもの出来候由、病状を細悉申越され候はば医薬の手段致すべく候。兎角用心肝要なり。」と手紙で様子を聞いている。これに対して松陰は「春以来未だ曾て已まず、或は盛んに或は衰え、此の節は衰え居り候。硫黄甚だ妙、道中にては之を用ふ。獄中火用心の地にては遠慮之れあるべきに付、丸薬とし用ひたし。久しく獄に在り體弱まるは之あり、然れども萬症自ら消ゆ、故に生命は却つて久し。譬へば灰に埋るの火の如し。」と返信した。安政元年春から「絶えて其の患なし」だった小瘡が再発したらしい。病状は増悪、消長を繰り返しているようで、また「硫黄甚だ妙」とあるから硫黄が効くようである。ちなみに手元にある昔の教科書(昭和16年)『皮膚及性病学』⁸⁾を読むと、「疥癬薬トシテ最モ廣ク應用サレ且ツ有効ナノハ、硫黄デアル」と記載されていたので、

小瘡は疥癬を十分に想像させる。すでに幕末あたりから疥癬では硫黄の効能が知られていたのかもしれない。そして、兄も松陰も小瘡をお互い疥癬と了解していたようで、和田先生も書いているように、この当時どこにでも疥癬が流行っていた⁵⁾。

11月8日、兄が「小瘡薬、同氏(瀬能吉次郎^{*1)})より貰い候」と松陰に書き送っているのが小瘡はなお活動性だった。兄は薬を調達して、それを野山獄に持っていったのであろう。獄舎に松陰は幽閉されているが、手紙や薬は自由に与えることができたようだ。翌日11月9日、兄が「小瘡薬、坪井信道^{*2)}秘薬にて瀬翁よりもらい候アンタラコカリ二分・甘草水一分なり。如し舌へあたり呑み難く候へば、その段申越さるべく候、甘草を増し申すべく候。一包一日分なり、両度に御服用。此の薬空気を受くればきけず、故に箱に入れ、気をつめ置くなり。」と書くと、松陰は「服用仕り候、舌に當ることなし。」と返信した。当時江戸で高名な蘭方医坪井信道の秘薬アンタラコカリは効果はなさそうである。

*1 瀬翁は瀬能吉次郎のことで長州藩江戸藩邸藩吏。松陰の父の友人。松陰に届いた荷物を預かってくれた。

*2 坪井信道は江戸後期の高名な蘭方医。1795～1848年だからこのときすでに鬼籍に入っていた。

11月14日、兄は「小瘡薬能く小瘡を発せしめ、はしから癒し候との由、如何や。」と聞いてさらに「小瘡如何や、瀬翁の説に従ひ亦硫黄花三分を加え先ず是を御服し、格別効験之れなく候はば、良哉^{*3)}に示談致すべくと存じ候間、病状委曲申し越し下さるべく候。」と手紙を書くと、翌15日松陰は「此の説を聞き、初めて悟る、甚だかゆし。」と返信している。兄より送ってもらった瀬翁の持ってきた小瘡薬は効いていないのであろうか？ 硫黄花は「ゆのはな」のことである。

*3 松岡良哉。長州藩医。

11月27日、松陰は「小瘡も所せん手のはらへ出来、膿を持ち差したることはなけれどもこまり申し候。併し熱を發し候程の事は断えて之なく、満

身はかるくて小さきつぶかめ出来、うみにはなり申さず候。是れは定めて粉薬の効ある所に之あるべく候。硫黄加味、甚だ妙なるべし。象山甚だ硫黄を以て小瘡の妙薬とす。謂へらく、此の地球に復た此れに癒るものなしと。」と兄に報告している。小瘡は疥癬かもしれないという想像が、ここではっきりと疥癬そのものだと思い至った。松陰の文章は具体的でわかりやすい。「手のはら」といい「つぶかめ」といい言い得て妙である。「硫黄加味」の粉薬が効くことは理解できるが、「丸薬」として服用もしていたのであろうか。ちなみに松陰は嘉永6年6月から佐久間象山の弟子になっていた。象山は医学にもかなりの見識を持っていたことがわかる。

12月4日、兄は「昨日良哉へ行き汝の病状並びに是れ迄の薬を具さに咄し候処、医者のごせにて下地の事は悪く云ひ、アンタラコカリはきけずとて薬を呉れ申し候。格別の薬とも見えず候へども、先ず是れを服されて候ては如何之れあるべくや。又此の後の病状を直に良哉へ見せられ候様御認め下さるべく、兎角難渋の場処に付き、萬一ひどく成りては療養の手段出来兼ね申すべきに付き甚だ心にかかり申し候なり。」と心配すると、松陰は「数日来大いに佳し。象山甚だ硫黄の功を称す、宜敷宜敷用ひ数々効く、良哉も亦之を用ふるや。」とあって、象山のすすめる硫黄が奏効したらしい。

12月8日、兄が「小瘡萬一も内攻らしき様のことにてもあらば、昼夜に拘らず申越さるべく候。」と尋ねると、松陰「小瘡大抵全快、も早薬を止めてもよし、今五六日分も貰ひ申すべし。」と返信して、これ以降小瘡という言葉は出てこない。おそらく疥癬は安政元年末には治癒したと考えられる。

■ 松陰の手紙からわかったこと

以上の松陰の手紙から病状をたどってみると、1)発疹は小さい丘疹らしい、ときに小水疱を交える。2)手掌にできる。3)激烈な痒みを伴っている。そのため搔爬による疵になることから小瘡と呼んでいたのであろうか。4)皮疹は増悪・消長を繰り返す。

返している。5) 硫黄が奏効した。以上のことから、松陰のいっている小瘡は疥癬と断言して差し支えあるまい。そしてそれは、嘉永6年6月以前に始まっていったん消褪、安政元年春に再発して年末まで悩んだことになる。手紙がほぼ11月、12月に限定している(それ以外は1通しかない)ので、安政元年晩秋から冬にかけてもっとも増悪したらしい。その時期は松陰が萩の野山獄に入っていた時期ということになる。

■ 金子重輔のこと

ペリーのところに行ったのは松陰と弟子の金子重輔の2人だった。2人とも丁重に黒船から追い返されたが、金子重輔(変名澁木松太郎、農民)も疥癬にかかっていた。

安政元年5月21日、松陰は、宮部鼎蔵宛(松陰在江戸獄宮部在江戸)に「洩生回復、今は唯だ湿瘡のみなり。」と書いている。この湿瘡は疥癬を疑わせる。湿瘡とは湿疹様の変化を伴った疥癬を指しているのであろうか。金子重輔は黒船騒ぎで松陰とともに江戸の牢に入れられた。

9月3日、松陰は「其の東の第一舎は揚屋と申し、僕此れに在り」だが、農民だった重輔は「是假百姓牢と云ひ、澁生此れに在り」で劣悪な環境の牢に入れられた。江戸の獄舎から萩の牢獄に移った11月5日、松陰が兄に宛てた手紙の中で「澁生は初め小瘡満身遍満、中々一通りの事に非ず、其の後腹部へ、より出来候。出牢の日うみを出すこと一升計りと云ふ、其の毒は着萩の日には已に尽き瘡口も癒え候由。」と言っているから、重輔も松陰と同じように小瘡にかかっていたのであろう。「満身遍満」という言葉からノルウェー疥癬になったと言えなくもない。出牢とは江戸の獄舎から萩の牢獄に移送されたときだから(安政元年9月23日)、重輔のこの重症な疥癬は黒船騒ぎのときにはなかったはずである。牢内の劣悪な環境のため疥癬は全身に広がり、さらに「より」という細菌感染が併発したのではなかろうか。その後重輔は萩に移送されまもなく牢内で死亡した。松陰は、重輔の

惨状を書き連ねて泣き叫んだのである。

■ 松陰は疥癬で渡航拒否されたか？

今までの手紙から推定すると、松陰は嘉永6年6月以前から疥癬にかかっていた。いったん消褪したらしく安政元年春に再発した。ペリーの黒船に乗り込んだのが安政元年春(3月)だから、松陰も重輔も疥癬に罹患していた可能性は十分にある。しかし2人ともこの時点ではさほど重症ではなかった可能性が高い。悪化したのは疥癬に関する手紙が集中している安政元年暮れ(11、12月)だった。また、松陰も兄も医師さえこの皮膚病を不思議がるだけで、もちろん感染のことにはまったく触れていない。一方、ペリーらも当時疥癬の感染を知っていたかどうか？ 欧米でも感染説が認知されるのは明治13年以降²⁾のことだから、疥癬が感染することも知らなかったのではなかろうか。ということはさほど重症でもない疥癬だったならば、松陰や重輔が疥癬であることなどわかるはずもない。もしも仮に疥癬だとわかったならば、丁重に追い返されることなどなく乱暴に扱われたかもしれない。

しかしそんな瑣末のことよりも、ペリーら一国を背負う人物たちが疥癬程度のことですぐ往々左往するはずもないと思えてきた。実際は、松陰らが黒船乗船のときウィリアムス(ペリー)らも松陰らも疥癬のことなどまったく念頭になかった。それどころではなかったというのが現実的だと思っている。したがって、松陰が疥癬のために渡航を拒否された事実はなかったと断言したい。やはり政治的な配慮で松陰らは追い返されたにちがいない。

■ 回顧録

『吉田松陰全集 第9巻』¹⁰⁾には「回顧録」が収められている。冒頭「野山獄にありし時三月三日に遇ひければ、昨年の事を回顧し、感慨の至りに堪えず、因つて日を遂ひて是れを録すること左の如し 乙卯三月三日」と記されていた。獄中にいて過去を思い出して書いたとすると、松陰の記憶力は凄まじいというしかない。

読み進めていくと、「二十日 晴。余疥癬稍発す。因つて間を偷み蓮台寺村に往きて温泉に浴す。村は下田を去ること一里にして近し。是の夜、瀝生は下田に帰る、余は村に宿す。」とあった。ここで1カ所だけだが、突然疥癬という言葉が出てきてびっくりしてしまった。すでに述べたように小瘡という言葉を知って、それは疥癬であると断定したのだが、なぜ小瘡という病名から突然疥癬になったのだろうか？

ネット上で難波紘二先生は「疥癬という言葉は江戸時代にはなかったと思う。それは明治以後に作られたものであろう」と指摘されているのだが、私もまったく同意見である。とすると、松陰全集の編集担当者が勝手に小瘡をあえて疥癬とわかりやすいように変更したのであろうか。

それでは、疥癬という用語はいつから使われ始めたのだろうかという疑問が湧いてくる。おそらく明治時代に入ってようやく皮膚科学が体系化されたと考えている。その功労者は土肥慶蔵先生という東京大学皮膚科教授である^{*4)}。その際皮膚科的な用語は整理あるいは新造されて、白癬や乾癬あるいは苔癬、頑癬、魚鱗癬、陰癬などと同じように、疥癬も造語されたのではなかろうか。そんなとき、生前の福代良一先生(元金沢大皮膚科教授)からお送りいただいた論文が忽然と現れた。そこには、「土肥は、その著書皮膚科学(大正11年版)において汗疱状白癬の語を造り足跡・趾間・手掌の白癬の白癬全体を表現する言葉とした¹¹⁾とあったのでこの造語という推論はあたっているであろう。

*4 土肥慶蔵(1866～1931) 福井県出身。東京外国語学校から東京大学医学部予科に進んだ。ウィーン大学でカボジに皮膚科学・微生物学を学び、パリ大学でギョイオンに泌尿器科を習得した。その後東京帝国大学皮膚科梅毒学講座主任教授に就任した。(梅原亮：江戸時代の医師修業, 吉川弘文館, 2014)

この造語に関しては、司馬遼太郎の『胡蝶の夢』¹²⁾の中に「養生とは、衛生の意味である。衛生は、衛生学、あるいは公衆衛生といった訳語は、

この時代、まだできていない。衛生という訳語ができるのは、明治7年(1874)になってからである。」とあるから病名の造語は明治7年以降のことになるのであろう。もし事実ならば、当時、松陰が疥癬という病名を知るはずもなく、書けるはずもない。

このあたりを疥癬の大家・石井則久先生(ハンセン病研究所センター長)にお尋ねしたところ貴重な多くのご意見をいただいた。しかしながらなかなか結論までは至っていない。今後の課題なのであろう。石井先生には心からお礼申し上げます。

■ おわりに

ひょんなことから、前回の古文書と暴瀉病¹⁾から、吉田松陰と疥癬へと話題が広がってきた。個人的には心躍る世界となっている。

話は飛んで申し訳ないが、江戸時代、当然のことだが、標準語などなかった。各地方に方言があって、それは他国人と区別できるほどの独自性・多様性を有していた。そんな中、疥癬は「ひぜん(皮癬)」⁵⁾あるいは「小瘡」などと呼ばれて、地方によってさまざまな病名で認知されていたという想像は許されるのではなかろうか。しかし不思議なことに古文書は全国均一だった。たとえば薩摩弁はおそらくその地方の人しか理解できないのだが、薩摩に残された古文書は全国の人が共通に読むことが可能だったのである。そんな幕末、洋学が滲み入るように入り込んできた。それに伴って明治時代に入るとにわかに科学的な記述が求められるようになり、日本語は大きく変貌しながら今日に至っている。皮膚病の病名も土肥先生をはじめとした先人の皮膚科医たちは大いに悩み、いままでの病名、あるいは洋語と漢籍に当たってその整合性に大いに苦しんだのではなかろうか。それはわずか150年ほど前のことでしかない。そして、病名はしっかりと残されているのだが、どのようにしてそれらの病名が生まれたのかについてはすでに闇の中に混沌として埋もれている。

今回、吉田松陰の書き残した小瘡という病名が

実は疥癬だったという知見をみつけて、明治時代に行われた病名の造語について縷々述べた。混沌とした闇の中にわずかでも光を当てようとする試みなのだが、それはまさに温故知新かもしれない。

<文 献>-----

- 1) 服部 瑛, 服部友保: 皮膚病診療 39: 330, 2017
- 2) ウィリアム・H. マクニール, 佐々木昭夫訳: 疫病の世界史 (下), 中央公論新社, 東京, p.177, 2014
- 3) 司馬遼太郎: 世に棲む日日 (一) 第4刷, 文春文庫, 東京, p.88, 2006
- 4) 司馬遼太郎: 世に棲む日日 (二) 第3刷, 文春文庫, 東京, p.30, 2005
- 5) 和田康夫: イベルメクチンの福音を一疥癬, アタマジラミ症などー, マルホ皮膚科セミナー 247: 14, 2017
- 6) 服部 瑛: 吉田松陰と疥癬 その1, 群馬県医師会報 826, 40, 2017
- 7) 服部 瑛: 吉田松陰と疥癬 その2, 群馬県医師会報 827, 52, 2017
- 8) 服部 瑛: 吉田松陰と疥癬 その3, 群馬県医師会報 828: 48, 2017
- 9) 山口県教育委員会: 吉田松陰全集 第7巻, 大和書房, 東京, p.168, 1972
- 10) 山口県教育委員会: 吉田松陰全集 第9巻, 大和書房, 東京, p.357, 1974
- 11) 福代良一: 臨床科学 32: 1023, 1996
- 12) 司馬遼太郎: 胡蝶の夢 (4), 新潮社, 東京, p.174, 1979

お詫び

前回「古文書と暴瀉病」を報告した。その後調べていくと、安政5年のコレラの感染は、九州、山陽、山陰、さらに奥州、北海道の一部まで及んだようである。その発生源は長崎で、「安政五年七月十三日」と記した。しかしその後、『日本疫病史』(富士川游: 東洋文庫133, 平凡社, p.224, 1994)から、それは西暦で、旧暦に換算すると安政5年5月に相当することがわかった。とすると「長崎から江戸まで2週間あまりで蔓延するというスピード」である必要もなく、ごく普通に江戸にコレラが波及したということになる。ここに訂正させていただき、お詫びを申し上げる。